

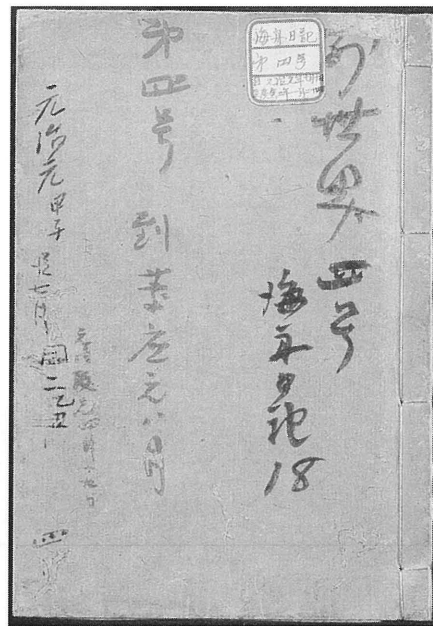
江戸東京博物館史料叢書

勝海舟関係資料

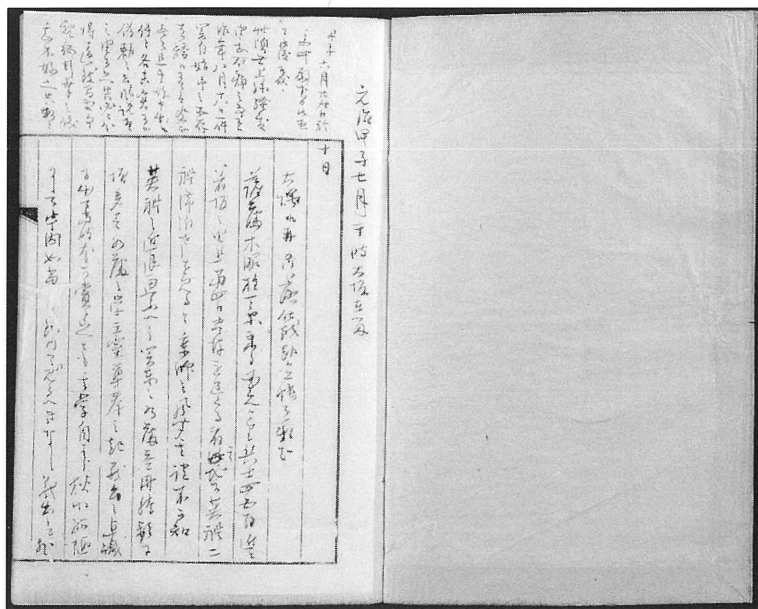
海舟日記

(二)

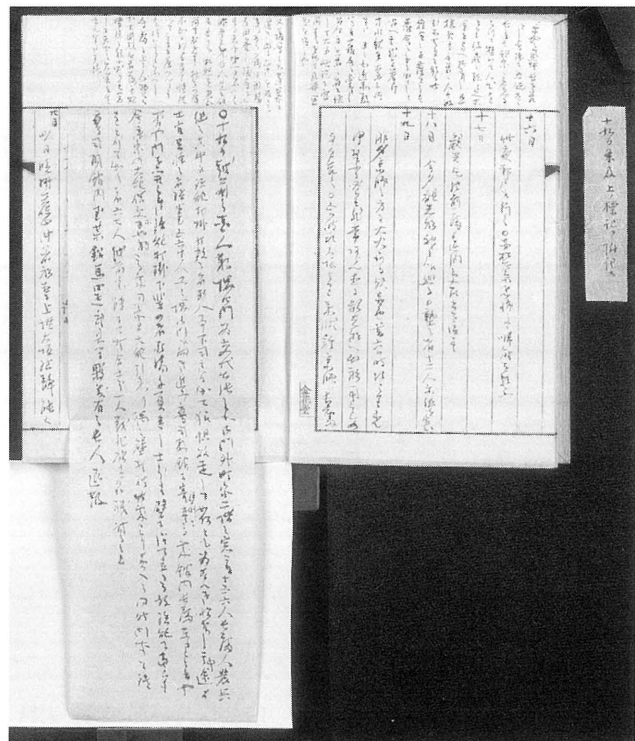
東京都江戸東京博物館
都市歴史研究室編



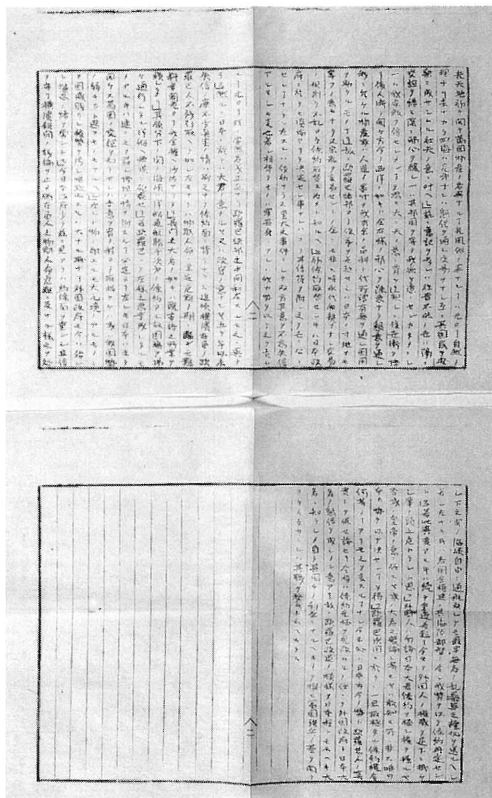
1. 「海舟日記 四」表紙



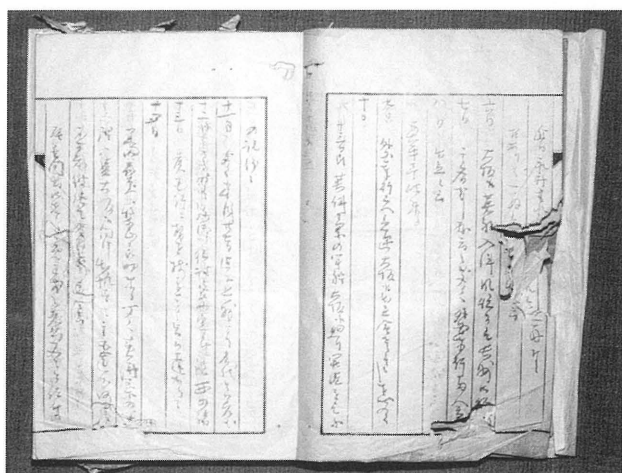
2. 「海舟日記 四」書き出しの部分



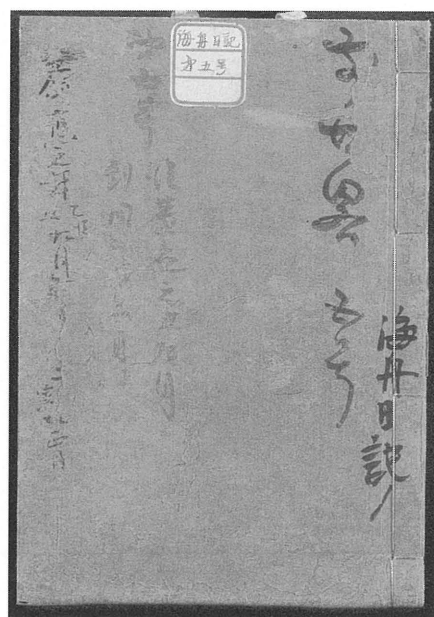
3. 「海舟日記 四」元治元年七月十九日条より補記の部分



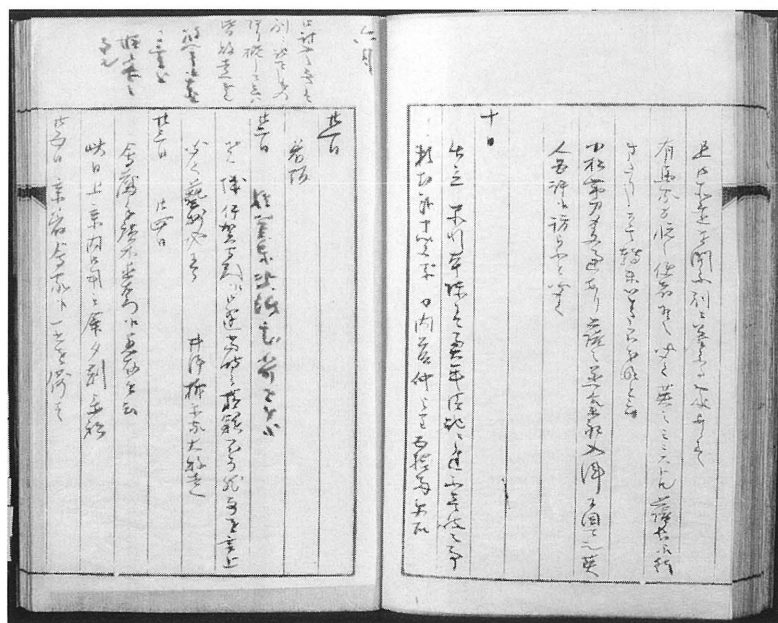
4. 「海舟日記 四」に挟みこまれた文書



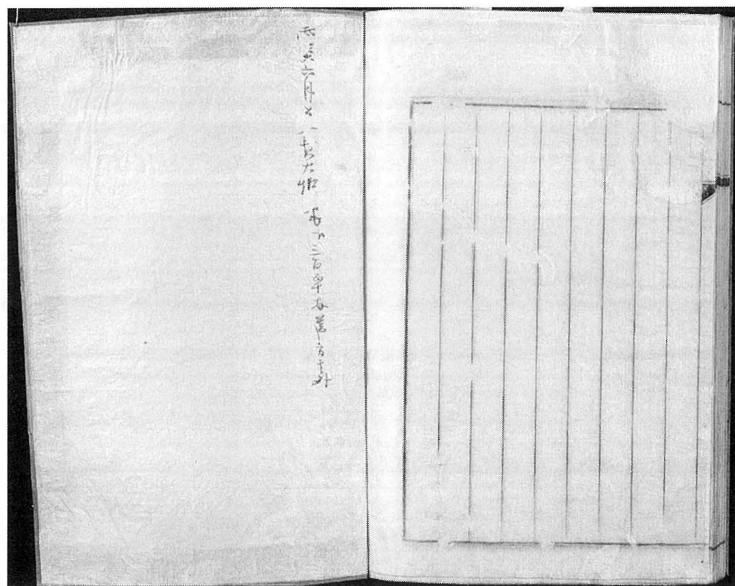
6. 「海舟日記 五」修補前の状況



5. 「海舟日記 五」表紙



7. 「海舟日記 五」慶応二年六月廿二日条より、後年の筆と思われる補記
(本文3行目および上欄注記)



8. 「海舟日記 五」巻末見返し



9. 「海舟日記 五」に挟みこまれた文書

目次

凡例

海舟日記 四

(元治元年七月十日) (慶応元年八月二十八日) 1

海舟日記 五

(慶応元年九月朔日) (慶応三年二月二十五日) 125

解説

落合則子 285

凡 例

一 本書は、東京都江戸東京博物館所蔵勝海舟関係資料のうち、「海舟日記」第四冊～第五冊（資料番号94201700～94201701）を翻刻したものである。

一 本文編は、中段を本文とし、上段に原書罫紙欄外に記された補記などを記し、下段には本文等に関する註を適宜付した。なお、註に記す藩名は、藩庁の所在地名を原則としたが、長州藩・薩摩藩のように通称・別称が一般に通用しているものは、これを採用した。

一 翻刻にあたり、原文書の様式を尊重するようにつとめたが、編集の都合により、原文書の形態を損なわない程度に、つぎのようにした。

- 1 日付は、便宜上ゴシック体にした。
- 2 文中に適宜、読点（、）および並列点（・）を加えた。
- 3 漢字は、当用漢字・常用漢字にあるものは、原則とし

てこれを用い、ないものは正字を用いた。また、異体字は「扣」「抔」は原表記のままとし、それ以外は当用・常用漢字に改めた。

- 4 宛字・誤字・衍字はそのまま表記して、右傍に（ママ）（衍力）を付した。正しい文字がわかる場合は、右傍に（〇〇力）と記した。ただし、以下の文字は「海舟日記」で常用されている宛字で、文字の用法としては的確ではないが、とくに注記はしなかった。なお、宛字のうち「趣」の意で多用されている「赴」については、読む上での便宜上「趣」に統一した。

阪（坂の宛字） 義（儀・議の宛字）

大低（大抵の宛字） 太夫・太輔（大夫・大輔の宛字）

割据（割拠の宛字） 掛念（懸念の宛字）

- 5 変体仮名は、原則として同音の平仮名に改めたが、助詞の「而」「得」「江」「之」は原文表記のままとした。

また、「箇所」「斯様」「一箇」などの「カ」「コ」を表す
ケは残した。

6 合字は平仮名にあらためた。

7 欠損、または判読不明の文字は、□□(字数分)、「」
(字数不明)で示し、触損などは右傍に(虫損)(欠損)
と記した。

8 踊り字は、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は
「ヽ」を用いた。大返しは「くく」(字数分)を用いた。

9 本文中の補記や加除訂正は、原型を活かすようにつと
め、当該箇所の訂正あるいは削除された文字に見せ消ち
「ゝ」を付した。

10 朱書は、右傍に(朱書)と記した。

一 巻末に、本書の解説を付した。

一 本書は、近松鴻二(当館都市歴史研究室歴史研究科長)・
落合則子(同学芸員)・石山秀和(同専門研究員)・高山慶

子(同)が編集にあたり、藤田英昭(中央大学大学院生)
の協力を得た。

一 なお、当館では、「海舟日記」を含む館蔵勝海舟関係文
書のマイクロフィルムによる閲覧を実施している。「江戸
東京博物館史料叢書 勝海舟関係資料 文書の部」(平成
十三年刊)に、「江戸東京博物館所蔵勝海舟関係文書 マ
イクロフィルム版目録一覧表」を付したので、あわせて利
用いただきたい。

江戸東京博物館
史料叢書

勝海舟関係資料 海舟日記 (二)

発行日 平成十五年十月三十一日

編集 東京都江戸東京博物館
都市歴史研究室

発行 東京都
(財)東京都歴史文化財団

東京都江戸東京博物館

〒130-0015

東京都墨田区横網一丁目四番一号

TEL 〇三―三六二六―九九一八 (研究室)

FAX 〇三―三六二六―一八〇〇二

印刷 (株) 勝田印刷

ISBN 4-924965-40-5C0021